



Title	パキスタン構想と民族問題
Author(s)	ラーフル, サークリテイヤーヤン
Citation	印度民俗研究. 1973, 1, p. 1-17
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/50341
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

パキスタン構想¹と民族問題

ラーフル サークリテイヤーヤン

パキスタン 構想が、昨今は賛否いずれにせよインドの全ての知識人の関心を引いている。このパキスタン構想を反動的、反民族的な指導者たちの売国行為だときめつけて葬ろうとしている人たちも少なくないが、また、インドのかかえている民族問題はインドのパキスタンとヒンドゥスタンへの分割に帰結すると解している人たちも随分多い。これについて詳しく論ずるに先立ち、民族問題は—パキスタン問題ももちろんこれに含まれるわけだが—単にインドだけの問題ではなく、世界の他の国々も、避けて通ることのできなかつた問題であることを申し述べておきたい。

1. 民族とは何か

(1) 民族の標識

ある人がどの民族に属しているかを識別するための最も有力な手掛りはその人の言語である。服装からも民族を識別することはできるが、今日では服装はむしろ民族性を失いつつあり、インターナショナルなものになってきている。ハット、コート、ズボンといったものにしても、もはや単に西欧の伝統的な服装ではなく、世界中にひろまってしまっている。従って、服装によって何民族に属するかを言いあてることはできない。民族特有の料理も民族性を識別する手掛りになることはなる。ベンガル人は魚料理と米飯を大変好み、パンジャブ人はローティー、すなわち、小麦粉のパンとギーと呼ばれる精製バター、それにミルクが最上だと言い、タミル人は200グラムあまりの野菜を食べるにも、それと同量の唐がらしとタマリンドの実をたつぶりかけないとどんな料理も口にあわない。グジャラート人は、ダール（豆汁）にさえ黒砂糖か砂糖を入れないと気がすまない。ビハール人はなんのおかずであれ、油で揚げることにしている。そしてジャガイモやナスのマッシュには絞り取ったままのからし油を用いることになっている。連合州西部の都会人は、いんげん豆やたちな豆の煮つけと、バーバルとかバブリーといった豆やジャガイモ、メリケン粉などを材料にしたせんべいのから揚げが大好物だ。マールワリー人の唐がらし好きときたらタミル人をしのぐ程だ。子供の頃から食べ慣れてきた食べもので独特の嗜好が出来上がるものだ。だからベンガル人には、ニューヨークにいても、油っこいものと魚料理が口にあう。イランでしばらく一緒に過ごしたイスラム教徒の友人は、イランでの単調な肉と米との食事とうんざりしてしまい、「食事と音楽はインド風に限る」との裁定を下した。

音楽にも民族固有の好みがある。洗練された趣味を持つ教養あるインド人の随分多くが、西欧の偉大な声楽家たちが歌うのを2分間といえどもじっとして聴いてはられない。無数の欧米人が聴きほれるような歌を物笑いの種にしてしまう。そういう人たちは、インドの歌も他民族の人々には同じように感じられるのだということを知らないのだ。食事と同じように、音楽も親しんでいるうちに好きになるものなのだ。次第に西洋料理を嗜むようになっていくインド人が、それをおいしいと感じるようになるのと同じように西洋の音楽もたしなむことができるようになるものだ。要するに、音楽と食べ物の民族固有の嗜好は、インターナショナルなものになり得るといえることなのだ。とは言っても、音楽と食物が、ある程度民族性をあらわしているということは確かだ。

しかしながら、民族性の最も明確なしるしは言語をおいて他にない。それは、単に人間の情感に基づくばかりではなく、民族の盛衰にも深い係りを持つものなのだ。たとえば、アイルランドのように民族的発展のために死語を復活させねばならぬ民族は数多い。言語が民族の興起にどれほど助けとなるかについて、次に述べてみよう。

言語のほかに、民族の独自性を強く特徴づけるものがもう一つある。それは宗教だ。筆者はここで文化を持ち出そうとは思わない。何故なら、文化は、言語、文芸、芸術、そして宗教の集合体だからである。民族について考察する場合に宗教を無視しようとする人が非常に多い。そういう人たちは宗教が永久不変のものではないとの認識に立っているのだ。ソ連邦のトルキスタン人は今から25年前には敬虔なイスラム教徒だったが、今では、老人たちだけがわずかにイスラム教を信仰しているに過ぎぬ。イスラム教がなくなっても、タージク人、ウズベク人、トルコマン人、そしてキルギス人は個々の民族性を喪失してしまっただけではない。これまでに、そういった民族の民族文化一言語、文芸、芸術は大いに発展したし、今日も発展を続けている。多数の人が宗教を民族性の重要な要素として認める気持になれないでいる根拠を他にも挙げる事ができる。しかし、そうするのは、目を過去や未来にばかり向けていて、現在の困難には目をつぶろうとすることに他ならない。固有の言語、文芸、芸術と同等に、もしくは、それ以上に人民が宗教を固持し、今なお宗教のためならいつでもどんな犠牲も捧げようとしている国では、宗教から目をそらすわけにはいかない。クルディスターンのクルド族とイランのシーヤ派の人たちはともに同じベルシア語を話しているにもかかわらず、クルド族は、自分たちは別個の民族だと主張して斗争を続けてきている。クロアチア語とセルヴィア語は、(ビハール州の)チャプラー弁とハーギーブル弁ほどの違いしかないのに、宗教が原因で両者は今日まで抗争をくり返してきている。クロアチア人はローマン・カトリック系のキリスト教徒で、セルヴィア人は他のスラブ諸族と同様にギリシア正教系のキリスト教徒なのだ。ある民族が宗教の影響を受けており、そしてまさにそれを土台にして独自性を打ち立てようと頑張っている限り、その宗教が過去には存在しなかったと

か将来は存在しなくなるかも知れない、などといって、宗教が民族性を構成するという考えを退けることはできない。また、それでは、現にある問題を解決することもできない。

筆者は、我国のイスラム教徒が、自らの民族性の構成要素として宗教に特に重きを置いている、と認めるのにいささかもやぶさかではない。

地理的条件も民族性の一要因ではあるが、このことについてはここではあまり触れる必要はない。

要するに、音楽、食物、服装は第二義的なものと解し、それらは無視してもよいものだ。しかし、言語、宗教、及び地理的条件は、民族問題を考察していく際にどうしても見落とすことができない。同一宗教を信奉していても、もし言語がまちまちならば、民族を別にするという問題がどうしても起きるだろう。例えば、もし我々がバキスタン構想を受け入れるとすると、バキスタン全体は単一民族ではないことになるし、そこでは言語問題が緊迫するだろう。アフガニスタンのバターン人の為政者たちは、先頃まで全行政事務、読み書きをベルシア語で行なっていたものだが、今日ではパシュトゥー語が有力になってきており、政府はベルシア語の追放を強力的に推進している。もつともアフガニスタン人民のうちでバターン人に次いで人口が多いタージタ人はベルシア語を母語としている。辺境州²の学校では、パシュトゥー語による教育が始まっている。筆者は辺境州のバターン人が母語であるパシュトゥー語を放棄してウルドゥー語を自らの民族語にする日が来るとは思わない。東ベンガルはバキスタンの半分を構成することになるだろうが、その住民たちにしたところで、ベンガル語というれつきとした母語を放棄してまでウルドゥー語を採用するだろうなどと楽観すべきでない。パンジャブ州でもパンジャブ語問題がすでに起きているし、シンド州やカシミール州でもいづれ言語問題が持ち上がるに違いない。このように、バキスタンが建国されたとしても、それは多数の独立した諸民族の連邦となるに違いないし、それは決して単一民族国家ではあり得ないだろう。

(2) 諸民族の発生

上では、現今の問題を考察するにあたって、宗教を無視するわけにはいかないことを述べ、インドにおいてはなぜ言語別の民族ということを考えねばならないかについて触れたわけである。実際、民族性というものが言語に依拠するのは確かなことだ。そこで、民族の発生について考察する場合、言語の発生に触れないわけにはいかない。この問題について深く立ち入るとなると主題からあまりそれないにせよ、極めて詳細に見ていくことになろう。さて、北インドの言語を何か一つ、ブラジ語とかアワディー語とか、あるいは、マガヒー語³といったものを例にあげてみよう。これらのことばがインド・アーリアン語だからといって、それを話す人々が必ずしもインド・アーリア民族だとは限らない。ブラジ地方に、ヴェーダ時代（西暦前1500年）以前に、あるアーリア系部族が到来した。それ自身はもちろんアーリア系で

あり、その言語もアーリア系であった。ところが、その地方には、もともと人種的にもアーリア系ではなく、言語的にもアーリア系でない人々が非常にたくさん居住していたのである。幾百年の間共住しているうちに両者は混淆してしまい、アーリア系の言語、あるいは、その派生語をすべての人々が習得していった。そして非アーリア系諸言語は、その地方から姿を消してしまった。言語も時の流れとともに変遷していくものである。このことは、ヴェーダ語、ショウラセーニー語、(ブラジ地方の) プラークリット語、そして今日のブラジ語を比べてみればわかる。⁴ 我国のかつて古代アーリア系ジャナバダ国家⁵ が存在した地方の住民は、今日いずれも決して純アーリア系ではなく、全部が混淆している。そして、これらの地方に話されている言語はすべてアーリア系言語から派生して出来上がったものなのだ。

これら歴史的に古い地方の諸言語には、次の理由からも注意を払う必要がある。すなわち、何らかの原因でカーリーボーリーのようなクル地方(メーラートコミッションナリー; アリーガル県を除く)⁶ の一言語が、今や北インド全域にわたって歴史の古い諸地方の多くで教育の媒介手段になってきており、われわれはこのカーリーボーリーに母語に代わる地位を与えようとしているのである。言いかえるなら、ブラジ、ブランデーリー、アワディー、バナラシー、ポージブリー、マイティリー、マガヒー、マールワーリー、メーワーリー、マールヴィー、チャッティースガリー、といった諸語⁷ を母語の地位から追い払おうとしているのだ。プラークリット語時代ですらマガダ地方やシューラセーナ地方の言語は独自の存在を認められていたのに、今になってもその逆方向に進もうとするのであれば、それは妥当でないばかりか可能でもない。これら民衆の言語は、我々が想像するよりずっと深く根をおろしているのだ。

ブッダの生誕以前はジャナバダ時代で、当時のジャナバダ国家(クル、バンチャーラ、コーサラ、カーシー、マガダ⁸) は、その地方で話されていることばで区別され、それぞれ政治的に独立したものとして存在していた。諸王は、版図を拡大した際、諸ジャナバダ国家の独立主権を倒すことは倒したが、言語などに対する観念は堅固で、両者が合して一つになるというわけにはいかなかった。カーシー国もコーサラ国の版図に入ったが、コーサラ王ブラセーナジット⁹ は、カーシー国の住民のことを考慮してベナレスに実弟をカーシー国王として配さざるを得なかった。このように地方によって民族性が異なっていたので、諸ジャナバダ国家が合して安定した一つの政権を確立することはできなかつた。マウーカーリー朝時代(西暦600年)から、ジャイチャンドのガハルワール朝(西暦1200年)までの600年間、カナウジは連合州とビハール州北部にまたがる広範な地域の首都だった。これに乗じて、その地域の支配者たちは、数多い古来のジャナバダ国家を崩壊させて、カナウジ族を創出したいと思った。そして、カナウジ国の住民が、カナウジ人としての誇りを持つことを欲した。この計画はいくらか具体化もした。それは、今日ブラーフマンとか酪農カーストのアヒールとか、商人カーストのカーン

ドゥーといった多数のカーストがカナウジ人としての同族意識を持っている点に見出される。しかしながら、つまるところこれは国家的民族ではなく、カーストという小さな垣根をめぐらしたことに過ぎなかつた。そして、ブラーフマンとかアヒールのように、カーストとして一段と広い地域に分布していた諸カーストは、更に細かく分裂したのであつた。

ここで以上のことを述べてきたのは、言語別民族を廃し、領域支配の名目で単一民族をつくる努力がかつて北インドでなされたことがあるが、それは不成功に終わった、ということと言いたかつたからである。もつとも、その際、いずれか一言語を課するような努力は為されず、サンスクリット語のような非母語¹⁰が、公用語とされていたのであるが。

2. ヨーロッパの民族問題

インドの諸民族について論じる中で、言語とそれに依存した民族意識が生じたのは、ある血縁的部族がどこか一つの地域に定着した時であつたということ述べた。ヨーロッパにおいても、そのようにして生じた民族が、スラブ民族とかゲルマン民族とかいうふうに様々な地域に移動して定住した。ところが、時がたつうちに、そうした民族間で混淆が行なわれ、そのために従来の言葉を棄て、別の言語を話すということが生じてきた。プロシヤ東部の人々は、元来スラブ系であつた。後にゲルマン系の影響でドイツ語を話すようになり、さらにヒットラーの純血アーリア帝国においては、こうしたかつてのスラブ民族の人々が、ゲルマン系アーリア民族として認められた。ともかく、新しい言語が受け入れられた場合、過去の歴史はほんの一部が抹消されるだけですむものだ。しかし、今日、東洋のみならずヨーロッパにも見られるような民族主義が出現したのは、そんなに古いことではない。

(1) ヨーロッパにおけるナショナリズムの出現

封建制下のインドにおいては、王家に対する忠誠心の上に人民の一体性が築かれていたわけだが、封建制下のヨーロッパにおいてもこれと同様であつた。事実、この時代には一般人民は物の数ではなかつた。王と、その寵を受けた僧侶たちが全権を握っていた。この僧侶たちにしても、高僧には王や封建諸侯の弟たちがなることになつていた。ところが16世紀になつてヨーロッパの商人が、世界の海を股にかけるようになり世界中津々浦々の富を蓄えるようになった。すると、封建諸侯の前でもみ手をしていた商人たちも、自分たちの力を自覚し始めた。これら商人層は、本国では政治にたずさわる資格はないものと考えられていたのだが、彼らが七つの海を越えて勇猛果敢な諸民族を制圧して支配を開始するに至ると、封建諸侯において他に支配統治の術を知る者はいないとは誰もいえなくなつたのであつた。

1757年のブラッシーの戦い¹¹では一人の番頭¹²が巧みな剣さばきを見せ、インドにイギリス王国の礎石をしっかりと定めた。同じことを、フラ

ンス、オランダ等の諸国の、株式会社という商人集団もやって見せたのだった。ヨーロッパの商人階層が本国における支配権を要求しないはずがない。

ブラッシーの戦いの3年後、1760年代¹³には、西ヨーロッパでは新たな時代が始まった。名づけて資本主義時代。この時代になると、商人たちは、単に職人たちの求める原料を、国から国へ運んで売るという業務をするだけではなくになった。機械類が新しく発明されたことに乗じて、工場を開設し、その安価な商品で世界中の市場を埋めつくすのだ。商人層は今や一層力を蓄積した資本家層に変貌する。そして他でもないその力が増すにつれ統治権についても彼らの要求が強まる。この主張を一層大きくするのに好都合だったのは、ヴォルテールやルソーといった大文筆家が出現したことだった。これら文筆家たちは、封建貴族の専制支配に反抗し、平民の政治を標榜する。資本家たちは平民の政治というスローガンの下に結集することに大いなる利を見出した。反封建専制主義闘争を彼らが主導したのはそのためである。ヴォルテールとルソーは1778年¹⁴に世を去った。しかし、彼らの筆が水泡に帰すことはなかった。それは、1789年¹⁵のフランス革命勃発で証明されている。ルイの独裁的な支配は終わりを告げた。そしてヨーロッパ中の王座は揺らぎ始めた。

フランス革命を通じて叫ばれた人民主権のスローガンとともに民族主義やナショナリズムが四方にこだまし出した。

(2) 中部ヨーロッパにおける民族主義の波

古代ローマ帝国を滅亡させたのはゲルマン民族だった。それだからこそ、彼らは自らをローマ帝国の継承者を以って任じたのだ。オーストリアのハプスブルグ家が全ヨーロッパにおいて1千年に亘って君臨したのはそのためであった。というのは、ハプスブルグ家の先祖がローマを滅亡させたゲルマンの首領だったのである。だからこそオーストリア帝国は神聖ローマ帝国よりも堅固なものと見なされていたのであった。¹⁶ところが、ハプスブルグ家には一つ厄介なことがあった。ハプスブルグ家は一方では、相互に抗争しかつそれぞれ独立していた2ダース以上ものゲルマン系領邦国家群の名目上の君主だったが、他方ではチェコスロバキア人、マジャール人（ハンガリー人）、ルテニア人、ルーマニア人、セルヴィア人、クロアチア人等、非ゲルマン系民族が居住する広大な国土の統治者でもあった。それに、その国土の一州であるゲルマン系の人たちが居住するオーストリア州の人口は微々たるものであった。このように神聖ローマ帝国は、主に非ゲルマン系諸民族によって構成されていた。ヨーロッパにおいて民族問題が大変深刻化して、オーストリアは難題の解決に当たらねばならなくなった。¹⁷全ゲルマン民族の君主たち—その中にはプロシヤやバヴァリアのような相当強大な君主もいたが—を糾合して単一ゲルマン民族国家を建設した上で、ゲルマン民族の側に立って非ゲルマン諸民族の支配・搾取を続けるか、あるいは、そのゲルマンの有力な諸侯同志を抗争させ、自らはそれに干渉を続けるかということにな

った。だが、オーストリアはそうしようとはしなかつた。19世紀前半にハプスブルグ家は、メッテルニヒのような権謀術数家を得た。しかし、彼の全精力は帝国内の非ゲルマン系諸民族の民族運動弾圧に費やされてしまった。メッテルニヒが為し得ずして終わったことを、ビスマルクがやってのけた。プロシヤを強大国に仕立て上げたのはビスマルクである。そして、ドイツ民族の名においてオーストリアを除く一全ドイツ君主を自らの下に結集させた上で、1870年にはフランスを大敗させた。そして、その後過去何百年の間、継承されて来た名だけのドイツ領邦連合を蘇らせた。それによって、ハプスブルグ家を追放しプロシヤ王を全ドイツ領邦のカエサル、すなわち、皇帝に推挙せしめた。この帝系は三代続いた。1933年にヒットラーが登場するまで、ドイツ内には民族統一が達成されることはなかつた。当時でさえ、ドイツには22の王家とそれぞれ独自の政府が存在していた。ヒットラーは登場すると、それらの独自の政府を廃し、自らが全ドイツ民族の最高権者となつた。彼はばらばらになっていたドイツ民族を糾合するだけでは飽き足らなかつた。今や全世界に血にぬられた支配をおしつけようとしたのだつた。ここで、ヒットラーがかくも大成功を取めたわけには、民族意識の果たした役割に少なからぬものがあつたことは明白だ。

神聖ローマ帝国の19世紀中葉における情況を見るに、フランスで湧き上がった民族主義の波が、東ヨーロッパの非ゲルマン系諸民族の間に広まり始めたことが分る。オーストリア帝国内で最も勇猛果敢だつたのはハンガリーのマジャール人だつた。19世紀中葉に最初にこのマジャール人の間に民族主義の大波が湧き上がった。ルイ・コシュート¹⁸（西暦1802～1894年）がナショナリズムの波の中心的指導者であつた。神聖ローマ帝国はマジャール人軍人を大いに必要としたが、この仕事は忠誠なマジャール人諸侯たちを通じて行なわれていた。コシュートはオーストリアの専制支配に抗して激しい論陣を張り、弁説を揮つた。運動は、燎原の火のごとくハンガリーばかりかその外のオーストリアの被支配者たちの間にまで拡がり出した。コシュートは3年間投獄されたが、西暦1840年に釈放された。しかし、運動は常に拡大して止むことがなかつた。1848年3月3日の演説で、彼はオーストリアの支配体制を痛烈に批判した。この演説がドイツ語に翻訳されて10日後、オーストリアの首都ウィーンで学生・労働者が暴動を起こし路上にバリケードを築いて政府軍に抵抗した。¹⁹

オーストリアの専制支配者たちは、ハンガリーの要求を受け入れざるを得なかつた。

コシュートのこの民族運動には、オーストリア帝国内に住むすべての諸民族から同情が寄せられ、援助の手もさしのべられた。それらの民族は、マジャール人を先達として尊敬し、ハンガリーがその目的を達成した暁には自分たちに対して適切な処遇が行なわれるだろうと期待した。しかし、いざハンガリーが政治権力を獲得すると、ハンガリーは、仲間であるはずの民族—セルビア人、クロアチア人、ルーマニア人に対して自分がウィーンの政府

に要求し今や獲得した権利を与えるのを拒んだのであった。それら異民族は地方自治権と自分たちの言語及び風俗習慣を政府に認めてもらうという、たったこれだけのことをマジヤール人に要求したにすぎなかつた。しかし、マジヤール人は、これらの要求を一瞬間たりとも認めようとはしなかつた。ハンガリーではマジヤール民族しか認めないというかたくなな態度を続けた。市民的平等は認めてもよいが、マジヤール民族以外の如何なる民族もマジヤール語以外の如何なる言語の存在も容認しようとはしなかつたのだ。それだけではなかつた。彼らは、他の諸民族のマジヤール人への同化事業を実施した。そして、すべての学校及び役所ではマジヤール語だけを使用した。アメリカの歴史学者、G. D. Hazenは、その著『ヨーロッパ近代史』(Modern European History)(1937年)PP. 302—303に次のように書いている。

「マジヤール人は、全国民に対しては少数派ではあつたが、常に優勢であつた。・・・しかし民族意識は強く、それは、セルビア人、クロアチア人、ルーマニア人の間に影響を及ぼしていった。これら諸民族は、1848年の夏、ハンガリー国会に対して、マジヤール人がウィーン政府から獲得したのと寸分たがわぬ諸権利を要求した。彼らは、地方自治及び個有の言語・風俗習慣を認めさせようとした。ところが、マジヤール人はこれを一瞬間たりとも受け入れようとはしなかつた。マジヤール人は、ハンガリーでは民族はただ一つマジヤール民族—しか認められないのだと主張した。個人の市民的平等は、民族の如何を問わず、王国のあらゆる臣民に認めるが、マジヤール民族以外に別個の民族とか半ば別個の民族といったものは認められない。また、マジヤール人の言語以外の公用語も認められない・・・こういうことでものすごい民族的な怒りが爆発した・・・」

「マジヤール人は、自分たち自身が長年執ように主張してきた基本的権利を、どうしても他の民族に与えようとはしなかつた。マジヤール人は、時を移さず、抑圧政策、すなわち、マジヤール化政策、あらゆる民族を十把一からげにしてしまう、あの恐ろしい同化政策を開始した。」

「マジヤール人は、クロアチア地方のすべての学校でマジヤール語を教えるべきだとした。また、このマジヤール語を、クロアチア地方とブダペストの中央政府との間の、あらゆる公式の通信連絡に用いるべきだとした。」

ハンガリーのこの政策と、インドの多くの民族指導者たちの考え方の間には、非常に似かよつた点がある。すなわち、彼らは、彼ら自身過去50年間手に入れようとして戦つてきたその自決権を、他の民族には与えるつもりがないというわけだ。

(3) 東ヨーロッパにおける民族主義の波

トルコでは、19世紀まで専制支配が存続したが、1908年の夏にスルターン政権は議会制政府を認めることを余儀なくされた。²⁰ 前世紀末葉になつてもまだ、セルビア、ブルガリア等に対してトルコのスルターン政権

が君臨していたのであった。ヨーロッパの民族主義運動は、トルコに対しても影響を及ぼさずにはおこななかった。スルターン政府は、運動の指導者たちを投獄したり、国外追放にした。しかし、それで運動を押しつぶすことはできなかった。

1908年に青年トルコ党²¹が行なった無血革命の影響は、トルコ支配下の全民族—ギリシア人、セルビア人、ブルガリア人、アルメニア人のようなキリスト教徒、そしてアルバニア人、アラブ人、トルコ人のようなイスラム教徒諸民族—に及び、そして一様に歓迎された。ありとあらゆる所で、ありとあらゆる人々が喜びに湧いた。当時、あらゆる種類の民族的そして宗教的憎悪が、永久にトルコの地から雲散霧消するだろうと考えられた。この革命は帝国内のあらゆる民族の間に、熱烈な友愛感情を醸成した。

前掲書（PP. 556—7）によれば、「この革命は、スルターン支配下の津々浦々に信じ難い程熱烈に歓迎された。イスラム教徒もキリスト教徒も即ちギリシア人、セルビア人、ブルガリア人、アラビア人、アルメニア人、トルコ人、皆そろって、耐え難かった状況から解放されたという喜びの祝典に歓呼を上げて参加した。最も驚くべきことは、かつて帝国の津々浦々を荒廃させ分裂させた民族的、宗教的憎悪が完全に影をひそめたことだった。このトルコ革命は、近代史上もつとも友愛的な運動であるということが証明された。」

続けて（PP. 594—7）、「自由、平等、友愛の統治がまさに始まろうとしている、という希望と期待に、熱気がみなぎっていた。」

さて、トルコ人たちは、自分たちが目標として闘ってきた革命の諸原理をトルコ国内の他の諸民族の処遇に際しても認める、ということを行動を以って示すべきであった。ところが、これはのうけから失敗に終わった。自由、平等、友愛の諸原理を活かす代りに、トルコ人だけの独裁支配と絶対権を確立し、人民の諸権利を容赦なく抑圧した。イスラム支配者トルコ人たちは、とにも角にも全権力を自分の掌中に収めようとやっきになった。第1回議会選挙の際に、彼らは他の全民族が一緒になっても、自分たちが単独で多数を占めるように策略をめぐらした。彼らはキリスト教徒のギリシア人、アルメニア人、及びイスラム教徒のアラブ人に、政治上の権利を分割・割譲しなくなかった。当局の政策は、あまねくトルコ人にしてしまうことだった。アデンでは3万人のアルメニア人キリスト教徒が殺害された。しかし、当局は犯人たちを処罰しようとはしなかった。彼らは、宗教上の既得権をもイスラム教以外の宗教から取り上げようとした。商業にたけた少数派諸民族を不買運動やその他の手段で消し去ろうと欲した。マケドニアでは、イスラム教徒が少数派だったが、イスラム教徒を多数派にするために、他の地域からイスラム教徒を呼び寄せて定住させようと努めた。

「最初からして彼らはしくじった。自由、平等、友愛という主義を適用しようとはせず、独裁政治を復活しようとしたのである。そして、単一民族の支配と、人民の諸権利の容赦ない抑圧に努めた。第1回議会選挙においては、他のすべての民族を統合してもトルコ人が多数を占めるような策がめ

ぐらされた。トルコ人は、ギリシア系及びアルメニア系キリスト教徒やアラブ系イスラム教徒たちに権力を割譲するつもりはなかった。彼らの政策は、一種のトルコ化政策であった。トルコ人は、3万人のアルメニア人キリスト教徒が虐殺されたアデンの大虐殺の犯人を罰しようとはしなかった。トルコ人は、あらゆる宗教上の特権を、力で抑圧しようとした。彼らは、不買運動をして困らせたり、脅かしたりした。また、他の地方からイスラム教徒を移住させ、イスラム教徒の異教徒に対する比率を高めるようにしようとした。」前掲書（P.P. 598—9）

インドのイスラム教徒が、ヒンドゥー教徒が多数派であるが故に脅威を感じさせられているとすれば、上記の諸例からして、その脅威はあながち根拠のないことだとは言えない。とりわけ、ヒンドゥー教徒の資本家及び中産階級の人々が、統治機構を掌握する可能性がある限り、その政治が、トルコ人やマジヤール人たちの場合より寛大であることなど望むべくもない。

3. 民族の完全独立は不可欠

(1) 搾取の阻止

資本主義的な政治家たちは、あらゆる国において独立の意義を曖昧にしようたくらんでいる。そして、彼らのいう自由とは、経済的搾取の自由には他ならない。インドの資本家たちは、政治、特に会議派の激しい運動に沸き立つこともあったが、会議派が推進している独立運動のめざす独立が、自分たちに100パーセントの利益をもたらすものと見てとるや、彼らは会議派に対する共感を表明し始めた。そして、今日では、イギリスやアメリカの政府がその国の資本家たちに牛耳られていると同様に、会議派の采配を振っているのは、ヒンドゥー教徒の大資本家たちなのだ。独立運動が、どれ程資本家たちの商工業を発展させたことか—これは、第一次世界大戦から今日に至るインドの民族資本の増大を見れば分る。繊維製品は、戦前は高々5分の1を国産していたにすぎなかったが、今次大戦直前には、インドは、全繊維製品の僅か5分の1だけを、外国に頼るにすぎなくなっていた。以前はほとんど全部をジャワ島やモーリシャス諸島から輸入していた砂糖は、今やインドで生産されている。これに止まらず、インドは国産の砂糖を今や国外に輸出しているのだ。同じような、他の数多くの大企業がインドの民族資本家たちの掌中に落ちてしまっている。そして、インドの民族資本家たちの中でも最大多数を占めるのがヒンドゥー教徒の資本家たちだ。「統一インド」22のスローガンを叫んでいるヒンドゥー教徒の資本家たちや彼らの代弁者たちが、同様にしてイスラム教徒が多数を占める地方でも産業を自らの掌中にし、搾取を継続することを企んでいないと、誰が言えようか。筆者は、イスラム教徒のパキスタン構想の指導者たちにも、経済的搾取をしようという、極めて強欲な計算が働いているのを認める。しかし、だからと言って、イスラム教徒の多い地方で、ヒンドゥー教徒の資本家たちの公然たる搾取を放任

している、ということには決してならない。実際、このパキスタン構想を支持する者とそれに反対する者の心理を分析してみるなら、両者とも搾取に都合のよいようにこれらの諸問題を取上げているのが分るだろう。とはいえ、もし諸民族の独立を承認するならば、搾取を根絶する革命を将来するのに好都合に違いない。これが、筆者の言わんとすることである。

(2) 進歩の障害を除け

イスラム教徒の資本家たちは、新興資本家が決して進出できないような大資本家たちの天国—独占体制—を築くために、イスラム教徒だけの政治領域を得ようと考えている。イスラム教徒資本家たちの眼中にある、ヒンドゥー教徒のおよそ6つの財閥は、今やいくつかの大トラストに変貌してしまっており、それらは多数の部門でイギリスやアメリカの億万長者であるトラスト資本家たちの歩みを踏襲し、かなり進んできている。これら財閥は、自分の銀行を設置し、自分の保険会社を所有し、繊維製品、砂糖、製紙、ジュート、油、及びその他諸々の大工場を掌中に握っている。単に「正義を！」と叫んで救いを求めているだけでは、小資本には、これら大資本に太刀打ちしていくことはできない。小魚が大魚に飲み込まれるのは、よく見かけることだ。このような独占体制では、ある地方が経済的に発展するか否かは僅かな大資本の意向に左右される。何故なら、大資本が登場しないかぎり小資本同志では競合してしまって新しい産業が興きない。住民の大多数がこのような危惧を抱いているのにその人たちの意向に反して独占体制の餌じきになるにまかせるのは決して良いことではない。

(3) 宗教的及び文化的側面の考慮

宗教的側面がからむために、政治的混乱が生ずることについては、ヨーロッパの場合についてもすでに見てきた。また、宗教的に頭迷なために社会環境がそこなわれたり騒然となったりするような状況である限り、これを無視して、やれインドは単一民族国家だの、やれインドは不可分だのと悠長なことを言っではいられない。現代では、宗教は憎悪を撒き散らす以外にも為し得ないということは何人も否めない。宗教の名の下にインドでは毎年多数の土地で流血の惨事を招いている。イスラム教寺院付近での楽器騒音²³の問題は下火になるどころか激化の一途を辿ってきている。これら宗教上の騒動の根底にも経済的要因や利己主義者どもの思惑が働いている、と筆者は考える。しかしながら、それら経済的諸要因を排除するのは、宗教集団間に妥協を成立させること²⁴以上に不可能なのは、我国の民族指導者たちのほとんどが承知していることだろう。搾取の根絶はさておき、農民及び労働者の権利に関する僅かな法改正に際して、わが民族政権が各州で如何ほど厚顔無恥な態度をとったかは、我々すべての記憶に新しいところである。従って、コミューナル、すなわち、宗教集団間の紛争の根底を成している経済的要因の排除という問題を、こういった人々のところへ持ち出すことはできない。そ

れに、宗教に名をかりたこの種の厳しい分裂状況がなくなる限り、おためごかしの意見や聖者とか哲人、あるいは、天使様たちにおすがりしたところでこの相互不信や疑念を解消することはできない。最近の政治的問題を解決するのに際してナーナク²⁵やカピール²⁶を処方箋として持ち出そうとする試みは全くの自己欺瞞であろう。従って、各民族は、その多数を占める地方では完全な自主独立を達成すべきものとなる。

(4) 真の革命を支援するもの

インドは、無数の問題を抱えている。一貧困、文盲、迷信、社会的旧弊、カースト制度、不可触賤民制、教育の有無とは無関係の失業、官職に於けるカースト・宗教・地域による派閥とか対立、等々。これらすべてに効く薬はただ一つしかない。それは、全国民に衣、食、住、医療、教育等の便宜を計ることを政府が自らの第一の責務と考えるような政治経済制度が我国に生まれることだ。これは、人民の必要と利益のために産業が経営されて初めて可能となる。資本主義制度は十や二十の家族を億万長者にはできないにしても、一般人民を飢えと失業から守ってやることはできないのだ。これを説明するのに、ここで多くを語る必要はない。

諸民族の自主独立を認めれば、次のような意味で我々は大きな支えを得ることになる。即ち、そうなった場合、我々の経済を眼目とした斗争に対するコミューナリスト（宗派至上主義者）たちの妨害が減少するに違いない。イスラム教徒が多数を占める州では、労働者及び農民の斗争相手の大部分は他ならぬ多数派たるイスラム教徒ということになる。そこでは、イスラム教徒たちの主導権の下に行なわれる労農運動に、ヒンドゥー教徒を危機感に陥れてコミューナルな分裂を発生させることはできなくなろう。そこでは、「イスラム教の危機」とか「ヒンドゥー教の危機」とかいう偽りのスローガンを標榜して経済上の問題を隠蔽しようとの企みは出来なくなるに違いない。

〔未完〕

〔 解 題 〕

本論文 (Pākistān yā jātiyon kī samasyā) は、最初、ヒンディー語の月刊誌『ハンス』に掲載されたのであるが、訳出にあたっては、『インドの課題 (Āj kī samasyāen) 』(アラハバード、1945) 所収のものをテキストとして用いた。ラーフルがこれの執筆を開始したのは、42年6月9日である。当時、彼はハザーリーバーグ刑務所に服役中であった。

これが執筆されてからすでに四半世紀以上の年月が過ぎ去っているがインド亜大陸における民族問題を検討する際、一つの見解として重要な位置を占めるものと思われるのでここに訳出した。また、「母語による教育」を持論としたラーフルの本論文は、今日のインドの言語問題を考える際にも見逃すことのできぬものである。

次にラーフル・サーンクリティヤーヤン (Rāhul Sānkṛityāyan)

を簡単に紹介する。1893年4月に連合州（今日のウツタル・ブラデーシュ）アーザムガル県バンドハー村で婆羅門の家庭に生まれる。本名は Kedārnāth Pānde。少年期はウルドゥー語を学ぶ。母方の祖父母のもとで両親や弟妹と離れて育つという家庭環境もあつたが、軍隊勤務をしたことのある母方の祖父の昔語りや11歳の時、教科書で読んだウルドゥー詩の一節に感銘を受けたこともあり、異郷へのあこがれが強く、14歳の時、ベナレス、カルカッタへ家出したのを初めとして家出を繰り返す。16歳の時にはカルカッタで丁稚をし、翌年には通世の念に駆られてヒマラヤ山麓の聖地へサードゥーの姿に身をやつして放浪した。12年にはビハール州サーラン県パルサーでヴィシュヌ派僧院に入る。その後、ヒンドゥー教改革派の一派であるアーリヤ・サマージにひかれ、1915-16年はアーグラ、ラーホールでアーリヤ・サマージの学校で勉学。

その後、アーリヤ・サマージの宣教活動に従事。16年頃から仏教への関心を深め、パーリ語や仏教経典を学び始める。こうした生活の間にも南インドを含めインド各地を旅行。21年にはビハール州チャプラー県で第一次サティヤーグラハ闘争に参加。22年1月には逮捕され、6ヶ月の刑に処せられる。獄中で共産主義関係の書物を読む。23年4月から2ヶ年間は反逆罪で獄中生活。出獄後も、 kongress に属し政治活動のかたわらアーリヤ・サマージの宣教活動にも従事。1927年5月にはセイロンに留学。28年9月にはトリピタカ・アーチャーリヤとなる。29年7月から30年にかけてチベットのラッサの僧院に留学。帰国に際しては仏教経典、チベット絵画類多数を将来。30年6月にはセイロンで得度。これまでの Ramodar Swamī の名を改め、法名ラーフル・サーンクリティヤーヤン（ラーフラ・サーンクリティヤーヤナ）となる。30年12月帰国。第二次サティヤーグラハ闘争に参加。サーラン県で指導。同7月 Bihar Socialist Party 設立に参加。同11月セイロンへ渡り、翌年7月マハーボーディ・ソサイティー（大菩提会）からロンドンに仏教の宣教活動のため派遣される。33年1月にセイロンへ戻るが、その間、共産主義文献を読み漁り、ソビエトに関する認識を深める。34年3月から12月にかけて再度チベット旅行。35年には日本、朝鮮、ソビエト、イランを旅行。36年5-11月には3度目のチベット訪問。37年11月からレニングラード大学の Th. Stcherbatsky 教授の招きで訪ソ。同大学に約2ヶ月間滞在。38年4月から10月にかけて第4回チベット旅行。同12月国民会議派社会党員となる。39年1月サーラン県で農民運動を指導。5月逮捕され、僧衣を脱ぐ。7月釈放される。

39年10月、インド共産党ビハール支部設立に参加。40年度の全インド農民会議の議長に選出されるが、同3月、共産党員として逮捕・投獄され。42年7月23日まで服役。44年10月イラン経由でレニングラード大学へサンスクリット語の教授として赴くが、戦時中のためテヘランで翌年6月3日まで待機。47年7月まで同大学で教授のかたわら中央アジア史の研究。同8月帰国。帰国後はヒンディー語学術専門語辞典の編纂のほか、

仏教学・歴史学・文学・語学など多方面にわたる研究・著述活動に従事。小説や紀行、伝記などの作品も多数発表。その全著作は200点以上に及ぶ。58年6月から4ヶ月余中国訪問、59年9月、セイロンのKelaniyaのVidyālan̄kar大学哲学科主任教授として赴任。61年8月病気のため帰国。63年4月14日歿。その豊かな才能と永年の研鑽による該博な知識は各方面に勝れた業績を生み出している。また、その行動的・実践的生涯は甚だ感銘深い。

主な著書・訳書・註釈書は次の通り。"Buddhacaryā" "Pramāṇa-vārttikabhāṣya", 'Hindī Kāvya dhārā', 'Vaigyaṇik Bhautik-vād', 'Madhya Eshiyā kā Itihās', 'Abhidharmakosha', 'Bāisvīn sadī', 'Shāsan Shabd Kosh', 'Volgā se Gangā', なお、自伝としては、'Merī Jīvan Yātrā' 5巻(1944-67)がある。

〔訳註〕

(1) ラーフルが本論文を執筆当時、パキスタンは国家として存在していなかったので、本訳文ではPakistanを適宜「パキスタン構想」「同問題」などと訳した。

パキスタン構想は、1930年のムスリム連盟大会における汎イスラム主義詩人ムハマッド・イクバルの「イスラム・ランド」提案に端を発すると言われるが、政治的に具体化したのは、1940年3月のムスリム連盟ラホール大会における所謂パキスタン決議(またはラホール決議)以後である。これは、ジンナーの「二つの民族論」Two-Nation Theoryに基づくもので、その要旨は、インドの北西部及び東部のイスラム教徒が多数居住す地域に独立国家の創設を要求するというものである。1942年8月の会議派の「インドから出てゆけ(Quit India)」決議以後の独立斗争高揚の中で、独立後の国家構成をめぐってこのパキスタン構想「二つの民族論」、ヒンドゥー・マハーサバー等の右翼政党や会議派の「統一インド論」、共産党の「多民族論」(1942年8月発表)が激しく議論されたが、この論文はその過程で発表されたものである。

(2) 正式には北西辺境州で、イラン及びアフガニスタン国境に接する地域。独立前の州構成は次のとおり。連合州、ビハール州、オリッサ州、中央州、ボンベイ州、マドラス州、北西辺境州、パンジャブ州、シンド州、ベンガル州、アッサム州。

(3) ブラジ語 西部ヒンディー語の代表的な地方語の一で、北部州の南西部、アグラ、マトゥラー、アリーガル地方に話される。

アワディー語 東部ヒンディー語の代表的な地方語。北部州の東部、州都ラクノウやアラハーバード地方に話される。

マガヒー語 ビハール州東南部のガヤー県を中心にしてその周辺で話される。「マガヒー」ということばは「マーガディー」が転訛したもので、学

識者の間ではマーガデー語ともいわれる。系統的にはベンガル語に近い。

(4) ヴェーダ語 ヴェーダ聖典に用いられている言語を後代の古典サンスクリット語と区別して言う。

ショウラセーニー語 シューラセーナ、すなわち、今日のブラジ語地方に話された中期インド・アーリアン語（西暦前6世紀—西暦11世紀）の
一で、2, 3世紀～7, 8世紀にかけてのものをさすと考えればよい。

ブラークリット語 「ブラークリット」という語は広狭様々の意に用いられるが、ここでは（ブラジ地方の）とあるので、ショウラセーニーよりもう一段階新しい、いわゆる、アプブランシャ語（7, 8～10, 11世紀）を考えればよいのであろう。

(5) インド亜大陸に進出したアーリア民族は、父権的家長制度による大家族（Kula）を最小の社会単位としていくつかの部族国家を形成していた。つまり血縁的共同体を営んでいた。しかし、やがて農耕文化等の発展、先住民との混淆と平行して、ガンジス川流域を中心として、地方（janapada）すなわち地縁的農村共同体を社会的基盤とする王権がいくつか形成された。この時代をジャナパダ時代（1000BC～600BC. Rājbaīlī Paṇḍeya, 'Prācīn Bhārat'）とよぶ。仏教興起時代以前に成立し仏典等にみえる十六王国（クル国、パンチャラ国、コーサラ国、カーシー国、マガダ国等）は、この地方国家（janapada）にあたる。

(6) (Kharī Boli) 今日の標準ヒンディー語をカーリーボーリーヒンディーと呼ぶことがあるが、ここでは、その標準ヒンディー語の母体となっている古代のクル地方、現今のデリー北東方、北部州の西北部を中心に話される言語。

(7) [ブンデーリー語] (Bundelī) 西部ヒンディー語の一地方語で、主にブンデール地方、すなわち、中央州の北部を中心に話される。〔バナラーシー語] (Banārasī) 一般には次のボージプリー語の西部方言とされベナレスで話される。カーシカーとも呼ばれる。〔ボージプリー語] (Bhojpurī) ビハール州の西部及び北部州の東部にかけて話される主要な言語。〔マイティリー語] (Maithilī) ビハール州東部のミティラー地方を中心に話される。マガヒー及びボージプリーと並び、ビハール語群を成す。〔チャッティースガリー語] (Chattīsgarhī) 東部ヒンディー語の一で中央州の東南部を中心に話される。

(8) (7) を参照

(9) 漢名、波斯匿王。王は、妹をマガダ国王ピンビサーラに嫁がせたがピンビサーラの死後、その後継者アジャータシャトルと争い、勝利してカーシー国を掌中に収めた。

(10) 非母語としてのサンスクリット語 サンスクリット語は、雅語・文章語とて厳密な文法規則の下にバラモン、王族等の所謂知識階層によつて人為的に現代まで維持されてきた。これに対して、古代に人々の口語として用いられたブラークリット語は、北インドを中心に先住民の諸言語から多くの

影響を受けつつ地方別に分化発達し、本文中の諸地方語を生み出した。そして当然、それらが各地方の母語となった。更に南インドでは、北インドの諸地方語とは言語系統を全く異にする諸語が用いられた。このような言語の多様性の中で、サンスクリット語は文章語・非母語であったが故に、ヒンドゥー文化圏の一体性を維持し文化的交流の媒介手段としての役割を果たした。中国文化圏の漢文、キリスト教文化圏のラテン語等々と比することができる。

(11) 英人クライブ (Robert Clive) がイギリス東インド会社軍を指揮して、フランス総督デュプレー (J. F. Dupleix) の後援の下にカルカッタを占領したベンガルの副王シラージ・ウッ・ダウラ (Siraj ud Daula) と支援のフランス軍を破り、ベンガルに於けるイギリスの覇権を確立した戦い。

(12) クライブのこと。

(13) 原文には1760年とあるが、産業革命の契機となった機械の新発明は、1760年代になされた。例えば、1764年ハーグリーブスの紡績機械、1765年ワットの蒸気機関、1768年アークライトの水力紡績機械等々。

(14) 原文には1788年とあるが、誤り。Voltaire (1694-1778)。J. J. Rousseau (1712-1778)。

(15) 原文には1792年とあるが、誤り。

(16) 1473年以後神聖ローマ帝国 (962-1806 A. D) の皇帝位を継承していたハプスブルグ家は、1806年ナポレオン1世のために神聖ローマ皇帝の称号の辞退を余儀なくされた。ここに神聖ローマ帝国は消滅し同家は単にオーストリア帝国 (1806-1918 A. D) の皇帝と称するようになる。

(17) ドイツ統一に関するこの様な方針が大ドイツ主義と呼ばれ、オーストリアを排除しプロシヤ中心の統一方針たる小ドイツ主義と対立した。

(18) コシュート (Lajos Kossuth) (1802-94) 当時オーストリア帝国 (ハプスブルグ家) の支配下にあったハンガリアで民族主義運動を指導し、自由主義を主張した。1848年二月革命に刺戟されて大マジャール主義による民族独立を要求し、9月にはオーストリアから独立と憲法を得た。1849年諸国の干渉を排して臨時政府を樹立し総督となったが、結局ロシアの干渉で独立に失敗。アメリカ、イギリスで亡命生活。彼の亡命後、ハンガリアには保守派が台頭。

(19) メッテルニヒは、このウィーンの暴動で失脚しイギリスに亡命。

(20) 原文には1902年とあるが、1908年の誤り。

(21) オスマン・トルコ帝国では、1876年12月に代議政治等の民主主義的内容を盛ったミドハト憲法を制定したが、のち保守派の巻き返して憲法は停止された。これ以後の専制政治に反対して、立憲政治を再び確立せんとして1894年にトルコ軍人、インテリ、学生、官吏等によって結成された民族主義結社が青年トルコ党である。党は、1908年エンヴェル・パシヤの指導のもとにサロニカで武装蜂起し、皇帝アブドゥル・ハミド2世に迫つ

て憲政を復活させ、政権を握った。この革命はただちに西欧帝国主義列強の侵略と、トルコ民族以外の被支配諸民族の噴出を招いた。

(22) (1) を参照。

(23) ヒンドゥー教徒とイスラム教徒等の宗派対立所謂コミューナル騒動は、広範かつ深い社会的背景を持つが、個々の騒動のきっかけはイスラム教寺院付近でのヒンドゥー教徒の宗教行事に伴う楽器騒音等極めて些細なトラブルが大半を占める。

(24) 1919年インド統治法以来、イギリス側は、「分割統治政策」に沿い1932年の「コミューナル・アワード（裁定）」1935年新インド統治法に基づく宗教別分離選挙制を通じて、宗教集団間の対立を弱った。これに対してインド側の各宗教集団は、議席の配分等をめぐって対立と妥協をくり返した。

(25) ナーナク（1469～1539 A. D）シク教の開祖。カビールなどと同じく、最高神への献身的な信仰をもち、清純な生活を守って、人々に奉仕すべきことを説き、カースト制度、偶像崇拜や形式的な儀式を無意味なものとして退けた。

(26) カビール（1440頃～1518 A. D）ベナレスにイスラム教徒の子として生まれ、バクティ思想、スーフィー思想、ヨーガ等から影響を受け、「ヒンドゥー教徒にもイスラム教徒にも同じ道が示される。人は神をアラーとよんでもよく、ラーマとよんでもよい」と説いた。

〔訳・註〕 ヒンディー 3年級 遠藤 格, 秦 智
〔解 題〕 古賀勝郎